

ものがたり

慈濟

一本の手すりが晩年を支える





撮影・黄筱哲

微かな光が希望をもたらす

善の一念に、生命の微かな光が集まります。

自分の能力を軽く見ず、

発心立願して世に幸福をもたらしましょう。

人間には愛があり、善の因縁が希望をもたらします。

福德と慧命の成長は時間が成就してくれます。

● 扉の言葉 文・證嚴法師 訳・済運



台南市東山区の胡お婆さんは、慈済ボランティアが庭への段差に設置した手すりにつかまりながら、低くなっている庭に安全に下りて歩き回り、住み慣れた故郷で安心して老後生活を送っている。(撮影・黄筱哲)



慈済日本サイト

目次

【編集者の言葉】
愛で以て傷を癒す
善耕／訳 4

【今月の特集】

一本の手すりが晩年を支える
安美プロジェクト・万一の時の予防
御山凜／訳 8
常樸／訳 23

【聞・思・修】
簡先生の電子機器レッスン
常樸／訳 29

【特集】
徳仰法師を追悼する
「無言」の良師に敬意を表す
惟明／訳 34

【特別報道・トルコへの支援】
震災後の廃墟に希望の小花が咲いた
葉美娥／訳 44

【證嚴法師のお諭し】
仏法は人間に在って、
生活の中に根付くものです
慈願／訳 58

【親と子と教師、三者の本音】
外見を良くする
江愛寶／訳 64

【グローバル慈善】
カナダ 街頭生活者に家庭料理の炊き出し
惟明／訳 70
中国 私たちが諦めなければ、
彼にチャンスが訪れる
施燕芬／訳 80

【行脚の軌跡】
痛快にやり過ぎ
済運／訳 100

六月の出来事
済運／訳 106

愛で以て傷を癒す

三月末、慈済基金会はオンラインでトルコ世界医師連盟と契約を結んだ。二月六日のトルコ・シリア大地震におけるシリア領内の被災者に対する医療支援は今後一年間行われ、延べ四万人余りが恩恵を受けると推測される。

これは、慈済がヨルダンのハーシム慈善団体の協力を得て、二月末に台湾の実業家から寄付された防寒具をシリアに送ったことに続き、被災地への更なる支援にあたる。

現在、EUの呼びかけにより、六十数カ国と数百の国際的な団体がトルコの被災地に人道支援を提供している。それに対して、十年以上にわたって頻繁に内戦が発生しているシリアは、国際社会の関心がごく僅かに寄せられている

のみで、国内は秩序を失い、外国からの援助も届きにくい。地震に見舞われたシリアの人々は最も弱い立場にあり、苦しみに喘ぐグループだと言える。

トルコは大量のシリア難民を受け入れている国の一つである。しかし、この大地震の後、国境付近に滞在する両国の被災者の間に、生き残りのための衝突が起きている。かつて「ニューヨークタイムズ」は次のように報じたことがある。地震前のトルコ経済はすでに日ごとに衰退の一端を辿っており、外から来たシリア人を排斥する動きは避けられない状態だった。地震後、シリア人が同等の救済を得るのは困難だが、トルコは相対的に住みやすいため、この時期にシリアにいる親戚の元に帰れば、将来トルコに戻るのが困難になる恐れがあるのだ。

この矛盾の中で、如何にしてバランス良く国籍を問わず、被災者に支援を届けられるかが、慈済ボランティアの知恵の見せ所である。トルコ政府の許

可を得て、ボランティアはシリア難民キャンプを訪ね、家庭訪問して名簿を作成した。ボランティアが最も未練を残したのは、毎回の配付で全ての被災者に行き届かなかったことである。今期の特別報道では、慈済災害支援チームが段階的に任務を果たし、花蓮の静思精舎に帰って分かち合った内容が掲載されている。しみじみと心に感じる所があった。

曾て或るトルコの被災者が、シリア国籍の慈済ボランティアから物資を受け取った時、「私たちは今、あなたたちが家を失った痛みを感じています」と言った。また当時、戦争で身障者になり、今回また地震で被災した若いシリア人のアナウンサーは、自分は悲惨な世代に生まれ、人生が再び試練に直面しているが、人助けをやめてはならないのだ、と言った。

そのほか今月の特集では、台南市を例に、二年以上前に発足した「安美プロジェクト」を追跡している。プロジェクトの内容は、独り暮らしの高齢者や身障者、弱者世帯を対象に、家の安全対策施工をすることで、転倒防止やそれに伴う医療費、社会サービス費を減らそうとするものである。このプロジェクトはコミュニティを単位として深く関わり、慈善支援を必要とする高齢者を発掘し続けることを目的としている。

清明節が過ぎ、春雨が大地を潤していた頃、静思僧団の最初の五人の大弟子のうち、五番目の徳仰師父が円寂した。今月号には師父の生涯にわたる行誼（こうぎ）に関する特集が掲載されている。師父は長年服飾工房を取り切り、器用に作られた僧衣は尼僧の威儀に端厳さを添えた。お人柄は物静かで忍耐強く、その行いは静思家風を現していた。そして、何気ない日常の中で真面目に修行する模範を後輩に残した。

抜苦与楽という慈悲心が連綿と続き、傷ついた人が癒され、愛の力が絶えないことを願っている。（慈済月刊六七七八期より）

台南の慈済ボランティアは浴室に入って手すりを取り付けた。年配の家主は付き添いながら、何度も感謝の言葉を繰り返した。



「今月の特集」

一本の手すりが 晩年を支える

薄暗くて凸凹のある通路、不便な和式トイレ、滑りやすい浴室の床……
これらは家の中に隠れているリスクで、
お年寄りの日常生活に影響を与えるものだ。
里長のお蔭で、慈済は慈善支援を直接家庭に届けることができた。

里

長（里は台湾の行政区画）が提供したりリストに従って、四十三人の慈濟ボランティアが台南市東山区高原里を訪れ、慈濟人でもある現地の七人の住民の案内で、五十世帯の一人暮らしのお年寄りや身障者を訪ねた。

台南市郊外の片田舎、東山区に差し掛かると、道中は稲作の農地や果樹園が山の斜面に広がっていた。ここに工場はなく、若者は就職が容易でないため、大半はよその土地へ働きに行くので、故郷に留まっているのはほとんどがお年寄りである。数年後には、老いた連れ合いを亡くして独りになるか、或いは祖父母で孫の面倒を

見る隔世世帯になっているかもしれない。

ボランティアが初めて高原里を訪れた時、そこは名実共に地勢が高く、道路は湾曲していた。里長の羅猷龍（ルオ・シエンロン）さんはボランティアに、その里（村）には約二百七十世帯の住民がいると説明した。「戸籍上は八百人強いですが、実際に住んでいる人は半分にも満たないのです。それに一人暮らしの高齢者や老夫婦、隔世代家族が四、五十世帯もあります。家は一軒一軒山に散らばっており、隣人といつても、実際は百メートルあるいはもっと遠く離れていますから、お年寄りの安全が本当に心配です！」。

高原里に住んでいる慈濟ボランティアの鄭宗智（ジョン・ジョンズ）さんは水道・電気が専門で、「安美プロジェクト」における住環境安全修繕チームのメンバーでもある。彼は「一本の手すりでも命を救うかもしれない」ことをよく知っている。そのため積極的に、年齢が近くて、数年前北部から故郷に戻って来て里長に就任した羅さんにコンタクトし、一緒に高齢者の居住環境の改善を提案した。滑り止め、転倒防止などを施すことで、多くのアクシデントの発生を減らすことができるのである。

「不慣れた和式トイレ、暗い照明、朽ちか

けた扉、凸凹のある通路、緩んだ石やレンガが敷かれた段差など、どれを取ってもお年寄りの日常生活に影響を及ぼすものであり、慈濟がコミュニティの安全に関心を寄せている理由です」。鄭さんのこの言葉は、若い時によその土地に行っても感じるようなところがあり、以前から誠意を込めて里民と交流して来た彼は、実は早くから心の中で多くの修繕が必要な高齢者世帯のリストを作っていた。

羅さんは先ず逐一戸籍調査を行い、慈濟の居住環境修繕の条件に合致するかどうかを理解した。二、三日の訪問期間中、



住民の中には不在の人もいたが、彼は諦めることなく、日を改めて出直した。または住民の間で支援の要請を互いに連絡でも取っているのか：ボランティアが家庭訪問する当日の午前中になっても、彼が提供してくれた数字は変化を続け、最

最終的に五十世帯を最初の訪問リストに記載した。

手すりの設置をするのを待っているお年寄りのことを思うと、どんなに重い道具を担いで坂を上ろうとも、慈済修繕チームは歩みを緩めるわけにはいかない。

タオル掛けを手すりの代わりに

張お爺さん夫婦は独身の長兄と同居して、一家三人は皆七十歳を超えている。行動が不自由な張お爺さんは両方の手に杖を突いて、やっと坂の上にある家に辿り着くことができる。

ボランティアが彼らの部屋から浴室とトイレに行く経路を詳しく調べたところ、浴室のタオル掛けに何本か結び目のある紐があるのに気づいた。それはお爺さんがシャワーを浴びて立ち上がる時の補助道具だったのだ。訪問ケアの経験が豊富なソーシャルワーカーの翁鏝雅

を見つけた。ボランティアは直ちに次回来て全て修繕することを約束した。

自分の家にも高齢の父親がいる鄭さんは、同郷のために喜んで奉仕したそうだが、「同じ住民ですから互いによく知っていますが、各家庭の条件とニーズは、家庭訪問の時にしか理解する機会がありません。お年寄りの安全を一番に考えて、今できることを先にやれば、設置の進度も少しは早くなります！」。

胡お婆さんは一人暮らしで、彼女の家に行くには先ず、一面に苔が生えた石段を通る必要がある。彼女の手足は敏捷な方なので、ボランティアは実年齢の

(オン・シユウヤ)さんは、直ぐ鄭さんと、縦型の手すりの設置と特注のシャワー用腰掛を提供することを相談した。

鄭さんは張お爺さんに、タオル掛けの紐を使う時は気をつけるように、と念を押すことを忘れなかった。というのも、「紐の耐久性にも限度がある」からだ。そして、慣れた手つきで巻き尺を取り出して測り、それからお爺さんに試しに座ってもらい、手すりを設置する位置を手が届く高さに決めた。部屋を一つ一つ通って行くと、突き当りにトイレがあったが、ボランティアはセメントの床に凸凹があり、何力所か剥がれて緩んでいるところ

八十六歳よりも若いと称賛した。彼女に二十八人のひ孫がいるようには見えない。

古民家（閩南式赤レンガの家）の軒下には、何脚か休憩用の椅子が置かれてあった。十数年前、胡お爺さんが家と庭の行き来に便利なようにと自分で作った上がり段があった。そこ上がった時、ボランティアの許茂忠（シユ・マオツォン）さんは足元がふらついた感じがしたので、直感的に相当危ないな、と思った。

古民家の裏には浴室とトイレがあり、扉を開けると、許さんは直ぐプラスチックの防水マットが滑りやすいことに気づいたが、胡お婆さんは笑いながら、「そ

うだよ。この間滑ってしまったよ！」と言った。僅かな調査時間だったが、指で数えて既に三カ所に安全面の心配があった。苔に覆われた石段、庭から家への上がり段、浴室の防水プラスチックマットだ。

ボランティアはリストに逐一修繕が必要な項目を記録し、お年寄りに家から一番近い子供たちとの連絡方法を詳しく聞いた後、施工前には里長を通して知らせることを約束した。

住居の修繕は単純そうに見えるが、実は考慮しなければならないことが少なくない。時には壁に穴を開けて手すりを固定する必要があったり、古いバスタブを

取り外したり、和式トイレを洋式トイレに変えたりするなどの工事をする。そのため、先ず、持ち家かどうか確認する必要がある、もし賃貸であれば、家主の同意が必要だ。もちろん借家人も然りである。訪問調査の時に施工方法を決めてから、世帯主と里長、ボランティアの三者が確認とサインをして初めて、プロジェクトが成立する。そして工事が終わった日、必ず本人または家族に試験的に使ってもらってから検収している。

ボランティアは、張お爺さんと胡お婆さんの住居を修繕すると同時に、新営、塩水、白河、柳営、後壁などの各里も訪



ボランティアの許茂忠さんは、正確に手すりの設置位置を印し、一本一本の手すりがお年寄りの手に馴染むよう願った。

問してアセスメントを行った。工事終了後も再度あいさつのために訪問し、日常生活や修繕、補強した部分などに関心を寄せた。お年寄りの立ち居振る舞いが安全であるのを見て初めて、ボランティアは安心するのだ。

この二年間に、大新営地区で計二十九の里長から慈済に訪問調査の要請があり、その数は五百世帯余りを数えた。そして、今までで既に三百七十世帯の修繕を終えた。

年配者の機能低下が
もう少し遅くなることを願う

今年二月、慈済台南支部のソーシャル
ワーカーである張育慈（ヅアン・ユー
ズー）さんと徐雅鈴（シュ・ヤーリン）
さんは、修繕チームと一緒に東山区水雲
里に来て、五世帯のお年寄りたちのため
に手すりの設置を行い、それが終わった後、
更に高原里に向かった。車は草木が生い
茂った山道を走り、風光明媚な景色に
春の日光が降り注いでいたが、時々遭遇
する上り下りが急な坂を見ていると、ボ
ランティアたちには、住民が普段どのよ
うにして外部と往来しているのか想像で

きなかった。

一行は春の陽が降り注ぐスモモ園に着
いた。入り口にあるインド桜が満開だっ
た。坂の上の庭に入るゲートの側で、車
椅子に座った張お爺さんと彼のお兄さん
が手を振りながらボランティアを出迎え
ていた。

二年近く会っていないが、当時、お爺
さんがシャワーを終えて起き上る時に力
を使わなくて済むように、安定した縦型
手すりを取り付けたが、ロープはまだ
残っていた。張お婆さんによると、お爺
さんは老化で少し認知症になっていると
のことだった。

張お爺さんは行動が不自由なので、あ

まり外出しない。親しい友人が家に来ると、
お茶を飲みながら座談するだけだ。新型
コロナウイルスの感染拡大が酷くなって
からは、子供たちが休日に帰ってくる以
外、友人と交流する機会はほとんどなくな
った。人と接することが少なくなった
ことで、お爺さんの心身は衰え始めた。

張お婆さんによれば、お爺さんが歩行
のために使っていた二本の杖の代わりに
車椅子を使うようにしたのは、熟考した
結果、その方が良いという結論からだっ
た。歳月は人を待たず、ボランティアは、
お年寄りの健康状態が衰える速度はまる
で滑り台のようだと言った。

張お婆さんの家からの道を幾つか曲が

り、胡お婆さんの家はあまり遠くない場
所にあった。広々とした庭は静寂に包ま
れ、ボランティアは「お婆ちゃん！い
らっしゃいますか？」と呼ぶと、胡お婆
さんはボランティアが取り付けた手すり
に掴まりながら立ち上がったが、明らか
に動きは遅くなっていた。

胡お婆さんの軒下に吊るされた、春節
の爆竹に似せた飾りと大小様々な赤い提
灯を見つけたボランティアが、好奇心か
ら、「子供たちは皆、旧正月に帰ってき
たのですね！」と尋ねた。

おばあちゃんは、「そうだよ。私には
二人の息子と五人の娘がいて、今年の旧
正月にはまた二人のひ孫が増えたので、



全部で三十人だよ」と嬉しそうに話した。

ボランティアは、「手すりは使い勝手がいいですか？」と聞くと、まだ手すりを掴んでいたお婆さんは「使いやすいよ。ほら、本当に快適。私のために付けてくれて本当に感謝しているよ!」と言った。ボランティアは設置した設備の安全性に問題がないことを確認した後、名残惜しい気持ちで別れを告げた。

コロナ禍にもかかわらず、台南のボランティアはいつもと変わらずコミュニケーションで住居の改善を続けた。案件の報告、家庭訪問、視察、施工、検収を経て、二十六地区の百三十三里で七百五十九軒



台南市東山区へ修繕に訪れたボランティアは、張家のお年寄りの日常生活におけるニーズと健康状態に関心を寄せた。以前、張お爺さんはロープを使って立ち上がっていたが、手すりができてからは、それほど苦労する必要はなくなった。

の修繕を終えた。修繕が終わったからと言って、ケアが終わるわけではない。例えばこの二年間、高原里の羅猷龍里長は随時、里民に支援が必要だと気付くと、慈済にアセスメントと支援を依頼して来た。「ここは田舎で、交通が不便な上に社会的リソースも少ない所です。時々廟から配付があるのは少量の米や麵、油、ドライフーズだけで、お年寄りや生活困窮家庭に実質的支援を提供するのは難しい



のです。ここにいるお年寄りは私たちの家族同然ですから、里長として私には彼らの安全を考える責任があります。ましてや慈済ボランティアが私たちの隣にいます。『他人をケアできるので、證嚴上人の『他人をケアできる人には福がある』という言葉通り、私も心から喜びを感じて率先してやっています！』。

台湾はもうすぐ超高齢化社会に突入し、地元でのお年寄りの介護ニーズは増ポランティアは胡お婆さんが庭へ上り降りしやすいように踏み台と手すりを設置した。古い住まいを守るお年寄りに安心して余生を送ってほしいのだ。

えるばかりだ。基本的な居住の安全を守ることができれば、それに越したことはなく、自立した日常生活を失う予防にな

るのである。そして、これも慈済が推進している「安美プロジェクト」における住居修繕の初心である。

安美プロジェクト・万一の時の予防

文・温宝琴、李委煌 訳・常樸

二〇二〇年三月、慈済は「安全な住まい・善美なコミュニティ（略して安美）」というプロジェクトを始動した。その中の「安全な住まいへの改善」という項目では、村長や里長たちと一緒に、一人暮らしの高齢者や身障者、弱者世帯に関心

を寄せ、「予防」という観点から「家での安全」プロジェクトを始動させた。昨年末の統計によると、既に三千七百五十世帯で改善工事が完了した。ケア世帯は台湾全土十六の県と市に及び、数百の里に上る。

「安全な住まい・ 美善なコミュニティ」 プロジェクト

高齢者が安心して暮らせる、
隣近所の助け合い

弱者世帯への
関心とケア

貧困家庭の
子供に対する
学費支援
と幼児ケア

へき地における
一体的なケア

住環境の安全改善プロジェクト

- 3年間に、台湾全土で **3750** 世帯が完了
- **項目**：安全手すり、照明の改善、洋式便器への改装、滑り止め処置、浴槽の撤去、バリアフリースロープの設置及び潜在的な家の中の移動経路における危険性の評価と修繕
- **対象**：65歳以上の一人暮らし高齢者、高齢者同士で生活している世帯、身心障害者
- **申請方法**：村長や里長の協力による案件の報告→家庭訪問と査定への付き添い→修繕工事→必需に応じた再訪ケア
- **ステップアップバージョン**：慈済の各自治体における介護拠点と福祉用具に関する窓口を結合し、高齢者に馴染めて、安心できるコミュニティを作ること

この住居安全サービスは、大半は小さな取り付けや修繕で済む。例えば、高齢者の家の風呂場や廊下に手すりや滑り止めを付けたたり、高齢者が上り下りできるスロープを付けたたりすることや照明設備の改善、和式トイレから洋式への改装、使わないバスタブの撤去など様々である。日常生活におけるちよつとしたことで、社会の表には出ないが、極めて厳粛な問題なのである。

政府衛福部の二〇二一年の統計によると、六十五歳以上の高齢者が事故で死傷する原因の一位は「交通事故」で、二位が「転倒」である。調査する過程で

分かったのは、主な転倒の原因は、「滑つたりつまずいたりすること」によるものだ。ということは、転倒防止がとても重要であり、さもないと高齢者の自立した生活が奪われ、寝たきりになったりして、その後は介護が必要になって、家庭や社会、国の健康保険などに大きな負担を掛けることになる。

手すりや滑り止めマット或いはバリアフリーのスロープなどの設置は、あまり多くのお金がかからない。東山区のような田舎の高齢者たちは、経済的に問題がなく、生活で多少の不便を感じても、往々にして現状に慣れてしまい、変化するこ

とを嫌ったり、どう支援を求めたらいいのか分からなくなったりするのだ。

台湾は、超高齢化時代を目の前にして、一人暮らしの老人、老老介護、高齢で自立した生活ができない、という状況やその流れは、より現実味をもって迫って来ている。高齢者が日常の立ち居振る舞いをする中で、滑り止め防止などの安全措置は最も基本的且つ重要なことであり、「未然に怪我を防ぐことができる」最も簡単な方法と言える。

高齢者の一人住まいや弱者世帯向けの様々な居住環境での修繕など、慈済は半世紀以来、早い段階からこの慈善活

動を行ってきた。その主な対象は、慈済がリストアップしたケアを必要とする世帯で、あちこちに散在した案件をケアしている。しかし、この三年間行ってきた「安美プロジェクト」は、一つひとつのコミュニティを主体にして進められてきており、積極的に町長や村長及び有志者と連携して、自分たちのコミュニティにいる独居高齢者や弱者、身障者を守ることに期待を寄せている。

楊お婆さんは一人暮らしだったが、ボランティアが訪問してアセスメントをした後、庭と浴室、お手洗いに通じる廊下を作った。その後、特別に再訪して検査し、さらにビスで補強した。お婆さんは嬉しそうにボランティアと記念写真を撮った。



慈済はケア世帯数の上限を設けることとはなく、ひいては大勢のボランティアを動員し、グループに分かれて各地域に出向いているのである。慈済のこうした家庭訪問や実地調査に基づいて修繕するという方式は、台湾全土でほぼ同じように行われている。それだけでなく、今では一步踏み込んだ慈善奉仕も行われている。例えば、台湾全土のコミュニティで長期介護、愛心弁当、更には無償で回収して修理した福祉用具などを提供している。

慈済は台湾全土二十一の県や市と協力の覚書を交わしている。公私の協力

を通して、慈善、防災、環境保護、公益などの方面で、夫々のコミュニティが安全防護ネットを立ち上げ、幸福且つ健康で永続的な住みやすい街作りを目指すしている。

居住の安全に関する些細な修繕でも、「共善協力」プロジェクトの小さな一環であり、高齢化社会では、日常で最もよく見られると同時に、実感できる奉仕の一つである。プロジェクトは現在進行形で、慈済は、人々が隣人に関心を寄せて助け合うことで、高齢化社会における「繋がりネットワーク」を構築しようと呼び掛けている。（慈済月刊六七八期より）

聞・思・修

文・簡毓嬾（新竹慈済ボランティア） 訳・常様

簡先生の電子機器レッスン

若かった頃、よく親に少しでも余計に尋ねられると、私は不機嫌になった。自分が中年になった今、両親も老い、

いつか互いに別れなければならぬと感じるようになった。

私は親との対話を大切に始め、自分が老いた時、

子供たちは私とどう接するだろうか、と思わずにはいられなかった。

毎

週木曜日、私は新竹静思堂の受付当番をしている。一週間一回のこ

の当番のメリットは、異なる区域の師姐（スージー）たちと知り合い、慈済に入った縁や様々な人生の話聞くことが

できることである。

ある日、受付に四人の年配の師姐が当番にやって来た。一人の白髪の師姐が登録手続き用のコンピューターの前に立って、「このコンピューターにどうやって

登録するのか、未だに分からないわ」とぶつぶつ独言を言った。

側にいた私はそれを聞いて、好奇心から、「あら、いつもどうやって登録しているのですか」と聞いた。「いつも誰かに手伝ってもらって、受付を済ませているのよ」と師姐が答えた。

瞬時にして私の教師魂が目を覚まし、彼女の手を取って、登録手続きをしてみた。そして彼女に登録の練習をしても良かった。彼女は、登録の仕方が分かると、子供のように嬉しそうな笑顔を浮かべて、「こんなに簡単だったのね。今までいつも、操作ミスをする、コンピュー

ターを壊してしまうのではないか、と心配していたのです」と言った。

続いて彼女はポケットからスマホを取り出して、「このスマホ、あまりうまく使えないので、使う勇気がないのです」と言った。「これは息子がくれた中古のスマホで、時々操作できないと、息子に聞きに行くのですが、彼はひどく怒るのです。『何度も教えたのに、まだできないの』と言うので、余計に使う勇気がないのです」。師姐は、はげ口を見付けたかのように、あらゆる辛い思いをぶちまけた。

私は彼女を慰めながら、「大丈夫ですよ。よく練習して操作ミスを怖がらない

で使えば、どんどん慣れて来ますよ。私が教えてあげますね」と言った。彼女を椅子に座らせ、スマホをオンにして、メッセージの基本的な機能の使い方から教え始めた。

他の三人も集まって来て、一緒に私が教えるのを見ながら、様々な質問をした。私は一人一人個別に教え、繰り返し練習してもらった。メッセージの受信や写真の編集、SNSでのメッセージ削除や設定のしかたなど、彼女たちは不器用に指

●簡毓嫻（左）さんは、毎週木曜日に新竹静思堂で受付当番をして、シルバー世代のボランティアと交流している。（撮影・王瓊婉）



でその小さなスクリーンをタツチし、押し間違えると、やり直していた。

教える過程で、私は絶えず彼女らを励ました。「間違っても大丈夫ですよ。スマホはそんなに簡単には壊れませんか。よく練習して、何度も試すことです。続けければ、できるようになりますよ」。

このシルバー世代の師姐たちは、実に真面目に学んでいた。彼女たちはできないのではなく、ひどく自信がなかったのだ。日進月歩のハイテク製品に直面して、どうしたらいいのか分からず、質問があっても、聞ける人がいないので、挫折が日増しに深くなり、時代に取り残されたという孤独感が湧いてきたのだ。

代の師姐たちは、まるで年長の家族のよう感じた。彼女たちが、自分にはまだ学習能力があり、社会で役に立ち、受け入れてもらえると感じ、操作ができるようになって明るい笑顔を見せた時、私にも大きな達成感もたらされた。

誰しも時の流れという巨大な歯車から逃れることはできない。師姐と科学技術の距離を感じながら、私が老いた時にこの世界はどうなっているのだろうか、と思わずにはいられなかった。私もその時代の新しいテクノロジーに驚いて戸惑っているかもしれない。

我に返って、「時代がどう変わろうとも、今を把握し、優しくお年寄りたちに

若い頃、私は目上に対してこんなに忍耐強くはなかった。よく親に、少しでも余計なことを尋ねられると、不機嫌な口調で返した。さもなければ、イライラしながらインターネットの使い方を教え、よく親を怒らせていた。

自分が中年になった今、親も歳を取った。いつか彼らと別れる日が来ると感じ出した。残りの日々が少なくなると知ってからは、親に電話をかける度に、まだ彼らと会話できる時間を大切にしようになった。優しく語りかけることを心がけるようになり、幼い子どもを相手にするようになり、辛抱強く彼らと付き合っている。

縁もゆかりもなく出会ったシルバー世代接すればいいのだ！」と自分に言い聞かせた。私も老いた時、若い人たちが優しくされたいと思う。

教え終わると、私は今日教えた内容を紙に書き、彼女たちにスマホで写真を撮らせ、家に帰ってから、それを見ながら練習できるようにした。その中の一人が、「お名前を紙の端に書いてください。覚えておきたいのです」と言った。彼女は私が書いた名前を見て、真心から私に、「簡先生、ありがとうございます！」と言った。私の心は、その感謝の言葉で、瞬時にして温もりと感動に満たされた。

教える側と教わる側、その光景はとても美しい！（慈済月刊六七七期より）



徳仰法師を追悼する 特集1

「無言」の良師に 敬意を表す

徳仰師父の性格は内向的でもの静か。
口数が少ないというよりも無口だった。
こうして修行者として後人に残した風格は、
身でもって教えたものである。

文・葉文鶯 撮影・蕭耀華 訳・惟明

静

かな午後、机の横に置いてあった携帯電話が静寂を破ったー静思精舎の徳仰（ドーヤン）師父（スーフ）がこの世を去り、慈済大学解剖センターに献体されたとのこと。長短様々なメッセージが続けて入って来た。

人生にも長短がある。徳仰師父は享年八十四歳で、長寿の方だった。しかし、證嚴法師は、人生の価値は寿命の長さにあるのではなく、生命の広さと厚みにある、と私たちに教えた。

徳仰師父の性格は内向的で、もの静かな人だった。口数が少ないというよりも無口といった方がいい。修行者として後人に残した風格は、身でもって教えてく

れたものである。

徳仰師父の後に付いて日常の作業をしている時、技術指導を必要とする以外は、作業場には作業の音しか聞こえず、雑談の音が聞こえてくることは全くない。目の前の仕事がどれだけ煩雑でも、師父は精神を集中させて続けていた。整然と秩序を保ち、忍耐強く、口を開くことなく、手だけを動かしていた。それが師父の禅定と精進だった。

晩年は病に苛まれたが、同門の弟子や居士または雇っていた外国籍介護士の手伝いを問わず、誰に対しても感謝し、自分の意見を言うことはなかった。ある日、私は師父に、自分の考えをはっきり伝え



てもいいのではないかと助言したことがあるが、師父は、人には夫々のやり方があり、迷惑を掛けてはいけなと言つて、全てを受け入れていた。それが師父の「随縁」と「善意に解釈する」姿だった。

好学だが、教えることを倦まない

数年前、《修・行・安・住―證嚴法師の五人の長老弟子》という本を書くにあたって、資料収集をする為に何度か精舎に帰った。徳仰師父と私は何年も前から

●徳融師父（右）、徳恩師父（左）と徳仰師父（中）は1970年一緒に出家し、台北臨濟護國禪寺にて具足戒を受けた。（写真の提供・花蓮本会）

ら知り合いだつたので、師父はジャーナリストという仕事の性質をよく知っていた。師父と「雑談」しようと思つて近づくようにすると、笑いながら「何しに来たのですか」と聞くか、直接インタビューを断わるのだった。

精舎の師父たちは、とかく自分たちがしていることは多くないので、文字にして残すほどではないと考えている。出版の締切りが目前に迫っていた時、私が徳仰師父と親しくなかつたならば、師父が毎週教えている漢文の《楞嚴呪（りようごんしゅ）》朗誦クラスの学生にはなり得なかつたと言えるだろう。

師父が自分から口を開く唯一の機会

は講義をする時で、生徒としてお年寄りの側にいれば、何かと観察することができた。

徳仰師父の私塾では、私たちは三人、五人、と円座に座る。いつも先ず師父が二回、続いて私たちが声を合わせて朗誦した。《楞嚴呪》というお経（陀羅尼）は梵語をそのまま音読みするので発音が特に難しい。徳仰師父によると、幼少の頃、花蓮の慈善院で《楞嚴呪》を勉強していた時、一ページ目でもう止めようと思つたことがあるという。

徳仰師父が当時、「難しい」と感じたのは、初心者である私と同じで、まるで「外国語」だったそうだ。漢字の横に



付いている発音記号は全く参考にならなかった。ましてやその漢文の発音は閩南語とは異なっていて、思いも寄らず師父も同じような経験をしていたのだ。しかし、今では流れるように誦経するだけでなく、多くの弟子に教えるようになったのである。

陀羅尼（だらに）はまるで連なったパスコードのようなもので、一つ間違えると、間違った暗号のようになる。師父は私たちの誦経を聞いている時、あたかも耳にふるいが付いているかのように、あらゆる発音やアクセント及び段落の位置を厳しく聞き分けた。少しでも間違えると、師父は直ちに私たちを止め、もう一度読んで

聞かせた。また、個別に質問するよう私たちを励ました。

徳仰師父は決して厳しい先生ではなかったが、うんざりした表情を見せることは一度もなかった。何時でも私たちがからの「もう一回読んで欲しい」というリクエストに応えてくれた。師父は学生の向学心を喜ぶが、唯一不機嫌になるのは、学生が食欲で早く成就したがる時だった。学生が手順を踏んで、真面目に学べば、師父はいつも無限の忍耐と包容力でもって受け入れてくれた。

●徳仰師父は幼少期から漢文を学び、出家後はその漢文で誦経することに秀でていた。

（左写真の撮影・蕭耀華）

法師を慕い、共に責務を担う

一昨年十一月、證嚴法師の一番弟子である徳慈師父のご遺体が慈済大学の模擬手術授業で起用された。丁度その時、徳仰師父は花蓮慈済病院に入院していた。見舞いに行った時、師父の一刻も早く退院したい気持ちを知って、私は不用意に、せっかく入院しているのだから、体をしっかり治してから精舎に戻るよう勧めた。そうすると師父は厳しい顔付きで私に、他の出家人は皆、仕事がとても忙しいのに、自分一人だけ入院して何もしない訳にはいかない、と言った。ましてや同門の弟

子たちに看病してもらうなんて…。

徳仰師父の思いは、私に師父の言葉を思い起こさせた。初期の頃、畑仕事で慢性的な睡眠と栄養不足に陥り、熱中症で倒れそうになったので厨房に駆け込んで水を飲むこともあったという。そういう時、疲労でいくら休憩したいと思っても、さつい日差しの下で作業している同門の弟子のことを思うと、一人だけ楽をする気にはなれなかった。

一番弟子と同様、徳仰師父は同門の弟子を思い、早く精舎に戻って仕事を手伝いたかった。その強靱な精神力は、病院のリハビリ・プログラムに対し、積極的

に協力する姿勢に表れていた。ある日、徳侔（ドーム）師父が特別に、精舎の裁縫工房から何本かの細長い布を持って来た。元々裁縫をしていた徳仰師父によると、早期の出家人の服はほとんど師父の手作りだったそうだ。徳侔師父は、その「語りかける生地」に親しんでいる五番弟子の徳仰師父に、布を編むことが手のリハビリになると考えた。

案の定、徳仰師父は布を手にするると、直ぐ縄を編み始めた。徳仰師父の元気な様子を見て、私は小さな経本を開き、徳仰師父に《楞嚴呪》を再度指導してもらった。自分が誦経する声はまるで子供が自転車

に乗るのを学ぶようなもので、道は真つ直ぐなのに、車体は左右に蛇行し、今にも倒れそうになる。徳仰師父が頭を下げ、私と一緒に経本を読んだ。耳元に響いた声は、私が間違ひなく誦経できるよう、願いを込めていたことが感じ取れた。

徳仰師父は長年裁縫と手作りの仕事に従事し、頭を低くしたまま作業していたため、頸部に大きな負担がかかり、顔を上げるのが一苦労だった。晩年は脳梗塞と癌で、四肢のリハビリだけでなく、呑み込む練習までしなければならなかった。それほど健康を害していても、同門の弟子の生活を思い、仕事を分担していた。

最後の一刻まで奉仕する

暫くして、言語療法士が病室にやってきた。療法士は、口数が少ない徳仰師父がお経を朗誦しているのを聞いて、これは最も良いリハビリだと言って、続けて徳仰師父に音階の練習を指導した。まるで音楽クラスにいるように、徳仰師父は言語療法士の手の動きに沿って、顔を上げたり下げたりして、真面目に発声練習をして筋肉を鍛えていた。

私は横で観察していたが、徳仰師父は学生であっても教師である時でも、いつも真面目で厳粛に臨んでいた。田満に

●晩年は脳梗塞を患ったが、徳仰師父は毎日仕事ができるよう望み、体力が許す限り、厚いサチャインチナッツの皮剥きを手伝った。(撮影・黄筱哲)

一生の修行を終えた後、徳仰師父は未解決の医学問題を医師たちに託した。大学解剖学科の「無言の良師」についてたくさん書いてきたが、徳仰師父は生前から「無言」の良師だったと言える。

この文章でもって、将来徳仰師父のご遺体から学ぶ医師たちが謹んで学習することを祝福し、これが徳仰師父の切実な望みでもあるのだと信じている。

(慈済月刊六七八期より)



震災後の廃墟に

希望の小花が咲いた

冬の霜は太陽が出ると、春の農耕に必要な養分になる。

地震で母親と姉を亡くした七歳の女の子は、

名も知らない小花を摘んで来て、「貴おじさん」に贈った。

その花は謝景貴さんの心の中に咲き、それを伴って台湾に帰った。

「それは震災支援現場でもらった一番大切な贈り物です」。

地

震が発生した時、皆慌てて逃げ出

し、何百万の人が大通りに殺到

しました。何千という道路に亀裂が入り、

何万棟にも上る建物が一瞬のうちに倒壊

し、何万もの人が命を落としたなど、と

ても想像し難いことです」。慈済トルコ

災害支援チームのメンバーである謝景貴（シエ・ジングエイ）さんは、二月六日に大地震が発生すると、チームメンバーと共にイスタンブールから何千マイルも離れた被災地へ向かった。もし安全な落ち着き先が見つからない場合は、被災者たちと同じように、毛布にくるまって、車の中で夜を明かそうとまで覚悟していた、と彼は当時を振りかえった。

国際災害支援のベテランとして、これまで数多くの地震後の災害支援を経験してきたが、いつも被災者の心の痛みに心から共感できていないことを感じていた。「難しい、とても難しいことです。

私たちが本当に心を静める以外に方法はありません。あたかも世界のあらゆるものが消え去った中で、静まれば静まるほど近づき、もはや八キロ離れた彼らと無関係ではなくなるのです」。

被害調査、家庭訪問、配付など、どれも容易ではない。建物の損傷があまりにも酷いため、十分なスペースを備えた安全な配付場所を見つけることが困難だった。また、トルコの地方自治体が提供したリストには、往々にして自国人の資料しかなかったため、もっと立場の弱いシリア難民に支援を届けるためには、ボランティア自らがテントエリアを訪れて

名簿を作成する必要があった。そうして
やっと、同じように支援を必要としてい
る人々に恩恵を与えることができた。

貴おじさんのお願い

テント暮らしの家族には、それぞれのス
トリーがある。四十三歳のサイー

ドさんは、太陽光発電所の警備

員をしていて、二年前にやっ

と八年間賃貸していた家を買

い取った。それは葡萄の蔓が

ある夢のマイホームだった。

「妻は妊娠していて、やっと



男の子に恵まれると楽しみにしていまし
た。地震当日はちょうど夜勤でした。帰
路の道路が分断され、元々車で四十分の
距離でしたが、三時間以上も掛かって
やっと家にたどり着きました」。

謝さんはサイードさんの寂しげな表情
を見ながら、地震当時の話を聞いた。妊

娠中だった妻と長女が亡くな

り、十二歳と七歳の娘だ

● ボランティアの謝景貴

さんは、サイードさんと一緒

テントエリアを訪れた。未

娘のアイサは、小さな花をお

礼に贈った。(撮影：モハメド・

N・M・アルジャマル)



けが残されたことを知った。

「その時、彼は配付現場にいたのですが、大愛テレビ記者の景卉（ジンファイ）さんから、彼の家へ取材に行きませんかと聞かれました。私は躊躇しました」。謝さんは昨年六月に妻を肺腺癌で亡くしていた。自分は二人で癌と闘った道を四年間という準備期間を歩んだのだが、サイドさんは一晩で肉親を失ったのだ。「どう彼を慰めたらいいのだろうか。彼に何をしてあげられるだろうか」。

謝さんは、サイドさんにだけ言った。「帰ったら私の代りに娘さんを抱擁してあげてください。そして彼女たちに、『貴おじさんが、お父さんの世話をあな

たたちにお願ひしています』と伝えてください」。

再びサイドさんを見かけた時、彼は老いた父親を伴って慈済の配付会場に来ていた。また、「貴おじさん」に会うために、七歳の末娘も連れて来ていた。その家族の三世代を目にした時、謝さんはやっと肩の荷を下ろし、シリア人の通訳ボランティアと共に、彼らの「家」を訪ねた。

「彼の家に行くと、大家族だと分かりました。何かが起きると、皆で互いに支え合っているのです。それを聞いて私たちは少し安心しました」。サイドさん一家が仮住まいしていたテントエリアに来ると、ボランティアたちは心のこもつ

たもてなしを受けた。生活環境は厳しいものの、トルコ政府から温かい食事と飲み水の提供があり、家族が寄り添い、世帯人数に従って配られた慈済の買い物カードもあるので、当面の生活は心配がなかった。

「この花を差し上げます」とサイドさんの七歳の末娘が、名前も知らない花を摘んで来て、「貴おじさん」に贈った。遠方から来た彼は驚いて、「これは震災支援現場でもらった一番貴重な贈り物です」と感動した。

「これまで雪がすごく降りましたが、太陽が出てきました。私たちも太陽になって、雪を溶かしたいと思っています」

と謝さんが言った。春の農耕季節がもうすぐそこで、全ては新たに始まる。「もし何時の日か立ち直ることができたら、あなたたちも私たちのように、周りの人に手を差し伸べ、支援してあげることができるはずですよ」。

皆に寄り添う

三月末までに、被害の大きかった三カ所である、トルコ南東部のハタイ県、ガズィアンテプ県及びシヤンリウファ市に対する緊急支援段階の配付を終え、十八万人以上の被災者がラマダンを過ごせることを願った。現在、慈済本部はト

慈済トルコ連絡所
イスタンブール



配付内容 イスタンブール (親戚を頼って来た被災世帯)

受益世帯数 (買い物カード)	1,083
受益者数 (買い物カード)	5,122
毛布	3,100
マフラー	3,100
配付活動回数	7
ボランティア延べ人数	831

配付内容 ハタイ県

受益世帯数 (買い物カード)	10,553
受益者数 (買い物カード)	53,522
毛布	964
マフラー	2,788
配付活動回数	9
ボランティア延べ人数	343

配付内容 ガジアンテプ県

受益世帯数 (買い物カード)	22,944
受益者数 (買い物カード)	104,053
毛布	8,863
マフラー	750
配付活動回数	22
ボランティア延べ人数	813

トルコ

カフラマンマラシュ県

二回目の震源地

ガジアンテプ県

一回目の震源地

シリア

配付内容 シャンルウルファ県

受益世帯数 (買い物カード)	4,346
受益者数 (買い物カード)	24,787
配付活動回数	2
ボランティア延べ人数	98

寄贈内容 アレッポ県

毛布	50,000
防寒衣類	457,920

トルコ・シリア震災

慈済が配付した物資の統計

支援の総計

買い物カードの受益世帯数 **38,926** 世帯

買い物カードの受益者数 **187,581** 人

配付回数 **40** 回

註：買い物カードは、各家庭が二カ月間の生活に必要とする物資を目安に発行されている。

2023年4月18日現在の統計



ルコ版「プロジェクト・ホープ」による建設支援を積極的に企画している。また、「世界の医療団」と協力の契約を交わし、彼らがシリアの被災地で移動医療をする資金を提供できるようにした。

トルコ南部レイハンリ市の「台湾世界市民センター」には、大量の被災者が避難しているが、現地では水と電気設備が酷く損傷して苦境に陥っているため、慈済は特別に太陽光発電の大手メーカーと連絡を取って、太陽光発電設備を寄贈す

●慈済の買い物カードを受け取った被災地の女性たちは、安堵の笑みを浮かべた。（撮影・余自成）

ることを決め、グリーン・エネルギーを活用して災害に粘り強く耐えることを目指した。

震災直後の緊急支援段階を振り返ると、四十日間で四十回もの大規模配付活動を行ったのは順調そうに見えるが、その裏には多くの困難があった。

慈済の被害調査チームは、地震発生から約一週間後の二月十一日にはトルコに到着したが、ボランティアたちの知る災害状況の情報は限られていた。その中で最も重要なニュースは、トルコ政府の初步的な統計によるもので、五百万人以上の被災者が支援を必要としているという

ことだった。

「首相府災害緊急対策本部では、スタッフが各地に向いて情報を報告していましたが、被災地が十一の県に及び、最前線での正確な被害状況の把握が困難でした。そのため、私たちは先ず何処へ行けばいいか分かりませんでした。選択肢は二つしかなく、一つは二週間待って政府が情報を把握してから、支援先を決めること、そしてもう一つは、先遣チームを派遣して、直接現場を視察することでした。」

謝さんは、被災地に入る前の最初の一步について語った。当時、災害調査チー



●トルコ・シリア地震の直後に、慈済は40回もの緊急支援の配付を行い、18万人あまりを支援した。
(写真・Abdulrahman Hritani)

ムのリーダーだった慈済基金会の熊士民副執行長は、政府による被災者数の予測に基づき、ウクナイナ避難民の支援経験から、慈済は四パーセント、即ち二十万人、四万世帯を支援することができるかと推算し、直ちに證嚴法師に指示を仰いで、迅速に決断を下した。

厳しい寒さの中、支援は待てない。カイセリ県の前副知事で、トルコ慈済基金会顧問のアリ氏の協力の下、チームメンバーは二月十二日に副大統領と面会し、被災地に入る許可を得た。先遣チームは二月十五日にイスタンブールから被害の大きかった地域に入り、調査、拠点捜し、

交渉などを行い、主チームが到着した時、直ぐ支援が展開できるよう準備をした。

一行は三日分の食糧、飲料水、ガソリン及び毛布を用意し、万一宿泊先が見つからない時は、車の中で過ごすことを想定した。幸いにもアリ氏の友人の実業家がハタイ県の北部で経営している温泉ホテルを提供してくれることになり、慈済の拠点も設置することができた。ボランティアたちは地元の立地を生かし、ハタイ県内各地及び近隣県の被害調査に向き、自治体と交渉し、慈済の支援は宗教や人種の区別はしないと繰り返し説明した。

トルコ慈済ボランティアの胡光中

(フリー・グアンジョン)氏は、トルコ語とアラビア語に精通していて、配付会場では、毛布と買い物カードを受け取りに来た被災者に、「手伝いに来ているボランティアのほとんどは、マンナハイ国際学校のシリア難民です。卒業生もいれば、先生やスタッフもいます」と説明した。

「十数年間、トルコが彼らの世話をししてきましたが、トルコが危機に陥っている今、彼らは黙って見ているでしょうか。いいえ。彼らは十四時間から十六時間かけて、車でここにやって来たのです。彼らはあなたたちと一緒にありたいと思っ

二月十一日にトルコに入り、三月二十八日に台湾に戻った謝さんは、證嚴法師の慈悲を身で以て感じることによつてのみ、苦しむ人々の泣き声や助けを求める声が真に聞こえ、そして救いの手を差し伸べることを誓うことができるのだ、と語った。

「このように発願することで、上人に感化された世界四十以上の国と地域の慈済ボランティアと一緒に、見知らぬ土地の人々のために愛の募金を募るようになるのです。皆で、あなたたちは孤独ではない、と教えてあげましょう」。

(慈済月刊六七八期より)



◎ 訳・慈願 絵・陳九熹

【證嚴法師のお諭し】

仏法は人間じんかんに在って、
生活の中に根付くものです

仏法精神や環境保全観念を語ることができるのは、
壇上だけでは限りません。

人々の中に交じって、生活の中の行動にあるのです。
清らかで、純真で、自然で、意味があれば、最もよく伝わっているのです。

慈濟は再び世界宗教大会に参加しました。この時代に、仏陀の精神と仏法の真諦を国際的な場で発表し、仏教を人間（じんかん）に広めていることは感謝に堪えません。

宗教は人生の宗旨であり、また生き方を教えてくれています。仏法は人間（じんかん）における最高の教育であり、人々のためになるものです。しかし、

惜しいことに一般の人は、線香を上げて、平安や財運等の願いを掛ける時に
拝むだけのものだと思っており、神格化されているのです。

私たちは因縁と機会を把握して、仏法の精髓を示さなければなりません。
中でも現在の気候変動を細心の注意を払って追究すべきで、それは人々の生活様式に大きく関係しています。つま

り、人の口の欲を満足させるために飼育されている大量の動物が大きな汚染源になり、環境に悪影響を及ぼしているのです。人口が絶えず増加する中で、口が汚染の源になってはいけません。菜食を勧めて、世間の浄化に努めましょう。仏法は正しい方向を示しているのです。

三年間の新型コロナウイルスに対する防疫対策は解除されましたが、所によつてはまだマスクの着用が必要です。エアロゾル感染を予防して自分を守ることは、皆を守ることになりません。即ち自分が感染しなければ、人に感染することはないのです。ですから「自分を愛して他人をも愛する」ことを小さな事と

軽々しく見ず、細かいことにも気を配り、自分のためにも他人のためにもなるように、この世の正しい方向に向かつて心しなければなりません。

慈濟は国連等の国際会議に参加していますが、必ずしも壇上で話す時だけ、仏法精神と環境保護の観念を伝えることができるとは限りません。人々の日常の行いと生活の中に入れば、その観念を伝えることができるのです。わざとらしくない伝え方が最も良い表現方法です。それは、衣食住と行動の全てに意味があり、清らかで、純粹で、自然に現れる品格なのです。

ですから皆さんには、このような国

際会議に参加することを重視して欲しいのです。それは「人間（じんかん）のため」、「仏教のため」に発言することなのです。ですが、驕るのでも人目を惹くのでもなく、謙遜して人々と和やかに仲良くし、私たちの親切な気持ちを人々に分かってもらうのです。愛の心を忘れることなく、どこにいても愛を感じてもらおうことです。

一介の人間でも

大きな事を成し遂げることができ、
貧しい人は永遠に貧しいのではなく、
発心立願すれば、

世の中に影響を及ぼすことができる。

私たちの行いは営利事業でも職業でもなく、人間（じんかん）を利益する志業なのです。これが私たちの宗教の在り方であり、法を弘めて世を利しているのです。

二千五百年前、仏陀はこの世に生を授かり、この世の全てにおいて、宇宙までも、知らないことのない大覚者でした。仏陀には正知、正見、正解があることを私たちも信じなければなりません。最近よく仏陀の故郷であるネパールに回帰する話をしますが、片田舎の現状は貧しく、経済状態は良くありませんが、住民は欲も要求もなく、素朴な本性を保ったまま、「足ることを

知って心には悩みがありません」。

ボランティアが撮影して来た映像を見ると、居住環境は衛生だとは言えず、私たちが心を一つにして初めて、彼らの生活の質を改善することができるとです。また生活を疎かにしたり、消極的であったりしないよう自分に警鐘を鳴らし、社会に対しては一層積極的になつて精進しなければなりません。

この世に生れたのは享受するためではなく、生命の価値を高めるためであり、心に愛があれば、最も豊かな人生になれるのです。如何にして裕福な人に施しを教え、貧しい人に心の豊さを

教えたなら良いか？貧しさのあまり自分を放棄しようとする人がいれば、顔を上げ、胸を張って努力し、自ら貧しい中の豊かな人になるよう励ましてあげましょう。ミャンマーの「米貯金」は、農民たちが毎日ご飯を炊く前に一握りの米をおひつに入れ、それが僅かであっても貯まれば多くなり、延べ八万三千世帯から寄せられた米が、四千世帯近い貧しい人を助けたのです。このような話が、慈済人の支援するネパールの人たちに伝えられ、貧しい人も喜んで人助けするようになりました。

ミャンマーの「一日一握りの米貯金」

の話の由来はとても感動的で、多くの宗教に関わる人たちと分かち合うことができます。今年の国連等の国際会議では何を伝えればよいかをじっくり考えてみるべきです。取るに足らないようなストーリーでも、一介の人間であっても大事を成し遂げることができ、貧しい人も永遠に貧しいわけではないのです。発心立願すれば、人間（じんかん）に影響を与えることができ、そのような話で互いに励まし合うことができるのです。

私たちは他人を称賛し、尊重すると同時に、自分の宗教を大切にして尊重

すべきです。「感謝、尊重、愛」を心に持つようにと、私は言い続けてきました。「仏教の為、衆生の為」は私の一番の目標ですが、環境保全と菜食も推し進めなければなりません。皆がそれぞれ自分の品格を上げて、仏法が世界の舞台に上がるよう願っています。どうぞ心してください。（世界合作事務発展チームの世界宗教大会への参加に関する報告の後に開示した記録。会議は三年に一度行われ、今年八月はアメリカ・シカゴで開かれる。慈済は二〇一五年から参加を始めた）

（慈済月刊六七九期より）

外見を良くする

問

私は中学生になりました。自分の外見が気に入りません。どうしたらいいでしょうか？

答・私は中学の時、色々な小説を読むのが好きでした。小説の中のヒーローは皆、流行の単行本を抱えて背が百八十センチのお金持ちだったり、武術に長けたハンサムな男性、ヒロインは皆、

とても上品な義侠心を持った女性だったり、お金持ちのお嬢様でした。その頃の私にとって、これらの本の中の人物がアイドルでした。自分はどういうと、大根足に小さな目、おかつぱ頭です。

内心悔しくて憂鬱なまま中学を卒業しました。

大学に受かった年、台北へ同級生のいとこと遊びに出かけました。彼女は、カールした長い髪に、薄化粧をして、標準語を話し、白にピンクがかかった健康的な肌をしてハイヒールを履いていました。私はと言うと、浅黒い肌にフラットなサンダルを履き、ごく普通の服で、パツとしない大学生でした。いとお喋りしても舌足らずで、極端にコンプレックスを感じたのを、あの夏休みで一番よく覚えています。

学期が始まってから、私は慈愛社に参加し、孤児院で子供たちの勉強に付き添ったり、刑務所を訪問して受刑者のボール遊びに付き添ったり、中重度養護ホームで病気の子供に付き添ったりしました。本の中のヒロインやいところへのコンプレックスはもうそこにはなく、私は自信を取り戻していました。

人生では、自分に自信を持つて初めて、人を惹きつける魅力のある人になることができるのです。外見は変わっていきませんが、自信に満ちて落ち着いた気質は変わりません。自信とは何で

しよう？それは、自己肯定であり、他人に影響されない、動揺しない心です。どのようにして自信を持った自分を作るか？以下の幾つかを参考にしてください。

教養のある人になる

「価値のある自分を育成すれば、人生の恩人を引き寄せる」、「詩書を読み、学を為すと、才能や品格が自ずと表に表れる」と言われます。

教養のある人が話をする時、自然と

いは、旅に出て徒歩で万里の道を行き、大地に、また行く先々で人文を学ぶことで教養を高めるのです。身心に関することは全て学ぶに値します。

ポジティブなエネルギーを放つ

人は誰でも、陽気で前向きの人といることを好みます。このような人は、チームメンバーに誘われ、皆、彼とお喋りするのを好み、一緒にいることでポジティブなエネルギーを感じます！

人を惹きつけ、魅力します。イギリスのコメディアン「Mr. ビーン」が代表的な例です。イギリスでオリンピックが開催された時、彼のロンドンオーケストラでのおどけた演出は、全世界の注目を集め、人気者になりました。トム・クルーズのようにハンサムではなくても、彼には教養があり、実力があります。従って、国際ステージに立つことができるのです。

では、どうすれば教養を身につけられるでしょうか。身心に有益な書籍を読み漁る、良い映画をたくさん見る、或



私はよくリハビリクリニックに行きますが、最近新しく二人の人が来ました。一人は良く笑い、前向きで陽気な人で、診察に来る他の患者さんと楽しく付き合っています。もう一人は、声が低くて眉をひそめ、よく人に誤りを指摘されます。誰も外見を気にしません。が、前向きで陽気な性格の人は、外見の良い人よりも好かれます。

生きていく力

「花が咲き誇れば自然と蝶が舞い、魅

力ある人には天の導きがある」と言われるように、人は追い求めるのではなく、他の人を惹きつけるべきだと言うことです。

私たちは生きていく力が必要です。一つは自分の得意とするものです。得意な分野で生計を立てます。もう一つは、自分の趣味であり、生活をもっと多彩にします。

Ⅲ. ビーンを演じるイギリスの俳優、ローワン・アトキンソンさんは、オックスフォード大学電機工学修士課程を卒業しましたが、演劇をこよなく愛し

ていたので、芸能界に足を踏み入れました。彼こそが生きていく力を持つ人です。外見は特にハンサムではありません

が、才能がずば抜けており、イギリス女王も彼を重んじていました。

世界的に有名なモデルのキャメロン・ラセッルさんは、TEDの演説で「外見が全てではありません。信じてください、私はファッションモデルです」と言ったことがあります。長い時間という川の流れて、美貌はなくなり、体つきも若い衰えて行きます。それなら、私たちはどうすれば、自分の外見で人

を惹きつけずとも人に好かれる、「Mr. ビーン」になれるのでしょうか。

変えなければいけないのは、自己を肯定せずに卑屈になり、諦めてしまう自分の心です。本当に人を惹きつける特質は外見ではなく、自分に対する態度なのです。

證嚴法師も「卑屈は自分を殺してしまふ敵です」と言っています。私たちは努力して自信を付けることで、自信が外見に打ち勝ち、これ以上外見にとらわれないようになるべきではないでしょうか。（慈濟月刊六七五期より）

街頭生活者に家庭料理の炊き出し

カナダはよく移民天国だと言われる。

私たちは幸いにも社会の日の当たる場所で生活し、

豊かさで社会福祉を享受している。

しかし、森の中や車に寝泊まりする街頭生活者たちの存在を、

見て見ぬ振りをしてはいけない。

ま

た紅葉の季節がやってきた。雁が金色の夕日に照らされながら、湖

水に軽やかに触れ、まるでこの地から去

るのを惜しんでいるかのようにだった。間もなく遠くの暖かい国に旅立つのだ。

二〇一五年、トロント在住の慈濟ボ

ランティアが初めてニューマーケット地区で街頭生活者向けの炊き出しを始めたのも、この金色に実る季節だった。ヨークカウンティにあるニューマーケット地区では、街頭生活者の中にアジア系の顔をあまり見かけないので、当初は果たして彼らが中華風の菜食を受け付けるか否か不安だった。しかし、独自の工夫を凝らす炊き出しチームはその実力で彼らの心を掴んだ。それからは年に少なくとも三回炊き出しをするようになり、彼らから熱烈に歓迎され、次の炊き出しは何時か、とよく聞かれるほどになった。

カナダは裕福な国で、市内の特定区域、

特に慈濟北トロント支部があるヨークカウンティでは、街を歩いても街頭生活者を目にすることは殆どない。カナダの八割以上の街頭生活者は表立って見ることはできない。彼らは森の奥深くに隠れていたりと、車で寝泊まりしたりしているのだ。中には精神疾患や麻薬による精神障害の人もいる。経済的な理由で街頭生活者になった人は割りと少ない。

ここ数年、コロナの感染拡大で、多くの人が心身と経済的にストレスを抱えるようになり、街頭生活者の暮らしや分布にも変化が起きている。二〇二〇年の統計によると、カナダでは街頭生活者の二



割が失業によって住宅ローンを払えなくなった人たちである。例年に比べ、八割の街頭生活者は長期間路上生活をしており、政府がいくら努力して宿を提供しても、その増加速度に追い付けず、入居の待ち時間が長くなっている。ヨークカウンティ中心街の保護センターがそれだけの人数を受け入れきれない為、彼らは北部の郊外に移り始めた。

たとえ街頭生活者の現象が、経済危機やコロナ禍によるインパクトに由来しているとしても、私たちの奉仕には影響しない。貧困線が低い国では、慈済の支援対象者は千人を超えており、直接助けを

求める人と交流することができ。しかし、カナダはプライバシーを重んじる福祉国家であるため、外見からは困っている人を見分けることは困難だ。そこで、現地の慈善組織と協力することにした。ニューマーケットの保護センターであるイン・フロム・ザ・ワールド（以下IFTC）とロフト・アウトリーチ・ヴァン（以下LOFT）は数十年の実績がある団体で、彼らがどこに隠れているかをよく知っている。慈善組織や彼らのニーズを無視して自分が寄付したいものを寄付している人が多い中で、慈済はそうではなく、彼らの不足分を補うことに重点を

置くことにした。

目下、保護センターと協力して、年に三、四回の炊き出しと夏の冬の大型配付活動を継続している。また、毎日各地区を巡回するLOFTの車による出張サービスに、随時不足分を支援するようにしている。これらのパ-

●慈済北トロント連絡所は、2015年からニューマーケットのホットフードステーションのスポンサーになり、年3回菜食の炊き出しを街頭生活者に提供している。写真は2018年、北トロント慈済人文学校の生徒が配膳に参加した時の様子。（撮影・梁延康）

トナーから毎月必要品リストを提供してもらったことで、季節が変わると彼らのニーズが変わることに気づいた。彼らは冬には毛布、夏には虫よけと傘が必要で、年間通して必要なのは除臭剤である。

側にいてくれるパートナー

慈濟北トロント連絡所は設立して二年で、街頭生活者ケアを任された。限られた人数から始めたが、今では何時でも身を挺して対応する地域ボランティアチームである。

カナダ人の多くはボランティアする習

性を使ってマットレスに編んで、毎月定期的に配っている。それは長年テナント住まいしている彼らにとつてとても役に立つものだ。何故なら、牛乳パックのマットレスは柔らかくて、地面の冷気を遮断してくれるからだ。それに加えてリサイクルしたペットボトルで作ったエコ毛布を配付しているので、彼らは一年の三季を過ごすことができる。特別に寒い冬の間だけ保護センターで過ごす。政府は力を尽くしているが、ベッド数はまだ足りない。特にコロナ禍で隔離を要したり、安全距離を保つたりする必要があるため、ベッド数がそれまで以上に大幅

慣があり、経済的に許す限り定期的に寄付もする。私たちは愛に溢れた福田に住んでいるのだ。真心とやる気を持っている人は実に多く、慈濟は数多くの慈善団体の中の一つに過ぎない。その為、毎年早めに炊き出しの日程を決めないと希望の日程を貰えない。ここは善の為に競う世界だが、如何にして多くの慈善団体から抜き出るか。「感恩、尊重、愛」という證嚴法師の教えが私たちの目標である。

カナダの夜の寒さが真夏でも水のように冷たいことに思い至った。二〇一九年から、北トロントのボランティアは、一般的な家庭にある牛乳パックを集め、

に減った。野宿を余儀なくされた時は、マットレスとエコ毛布が役に立つ。

LOFTの責任者であるマリー・アンさんは、慈濟は長年側にいてくれるパートナーだと、本心を語った。ホットフードステーションの担当であるマリー・アンさんも、慈濟が何時も健康的で美味しい菜食を持ってきてくれることに感謝の意を表した。特に二〇二〇年、コロナ禍の初期に、殆どの組織が活動を中止した時、慈濟はいつも通りに活動を続け、街頭生活者を励ました。社会的距離を保つ為に、セントラル・キッチンに入って調理することはできなかつ



●北トロント連絡所の慈済ボランティアはLOFTと協力して、定期的に物資を提供している。(撮影・丘啓源)

たものの、私たちは考えた結果、菜食レストランからテイクアウトすることで、食事の提供を続け、奉仕を疎かにすることはなかった。その真心が伝わり、私たちは慈済の竹筒貯金箱で慈善パートナーと良縁を結ぶことができた。

二〇二一年の統計によると、カナダ全国には二十三万五千人の街頭生活者がいるという。彼らが先進国に存在しているのは、紛れもない事実である。カナダは移民天国だと言われるように、私たちは幸いにも社会で日の当たる場所で暮ら

し、豊かな社会がもたらした福祉を享受している。しかし、私たちは社会の暗い片隅にいる彼らの存在を見て見ぬ振りをしてはいけない。慈濟がいてくれたお陰で、ボランティアの一員として、社会で日の当たらない人々を探し、彼らがどの季節にどのような物資や支援を必要としているのかを把握することができ、これからも心と力を尽くしていく所存である。

心が安らぐ場所は我が故郷

證嚴法師はいつも海外へ移住した弟

が濃くなってくると、故郷への思いで悲しみも濃くなる）を感じる。コロナ対策でなかなか台湾へ帰省できなくも、心はその故郷である花蓮靜思精舎と繋がっている。法師が海外のボランティアに呼びかける声は、依然として耳元で響いている。和と合で心の故郷に帰る道を見つけ、法師が私たちが人生の点検をするように、と語った言葉を心に刻んだ。カナダに移住してから既に二十五年が経ち、書類に記入する時の国籍はカナダになった。まるでタンポポの種が飛んだ所に根付くように、私はこの土地に根を下ろし、長い年月を

子たちに、よその国で暮らすのだから、その地で得たものはその地に返すべきだと言いつつ聞かせている。海外の他の地域に住んでいるボランティアの慈善奉仕の様子を聞いた私たちは、繰り返し考えた結果、規模がどんなに小さくても、各地域の文化の差異を理解すれば、運営の形式も自ずと異なってくるのだと分かった。北トロント連絡所のボランティアは努力してきたのだから、将来はもっと地域文化に溶け込み、様々な面から街頭生活者のケアができるはずだ。

秋の気配が濃くなる時はいつも、「萬里悲秋常作客」（杜甫の詩で、秋の気配

かけてこの地で子供を育て、いつしか一家はここで豊かな暮らしを楽しむようになった。今、カナダは私が居住する場所であり、台湾は故郷である。月は故郷の方が円いと言ひ、地域がその土地に住む人を育てると言われるように、この地の水を飲んでいいるのだから、この土地を守らねばならない。

カナダ東部のボランティアの一員として、心が安らぐ我が故郷に恩返しできることといえば、隣近所を世話し、特に助けを必要としている街頭生活者をケアすることに尽きる。

（慈濟月刊六七五期より）



●2022年5月、羅さん（中央）は再びアモイへ治療に訪れた。彼は長年人に見られなくなかった腕を出して、望んでいた半袖を着ていた。（撮影・呉徳華）

私たちが諦めなければ、 彼にチャンスが訪れる

この三年間、アモイのボランティアたちは三百キロの距離を厭わず、連城県まで四十回以上往復してやっと、乾癬症で苦しんでいた羅永華さんを説得し、治療を受けさせることができた。治療で症状が緩和され、彼は再び普通の人と同様の生活ができるようになった。

その日、空には霞が掛かっていた。

羅永華（ルオ・ヨンホア）さんはボランティアたちと共に、貧しさに苦しむ村人たちを訪問するため、畑の片隅にある白い壁と黒い瓦の背の低い家に来た。

二十年前、住人の周さんは原因不明の病気で、両足が浮腫んで痛み、関節がこわばって、曲げ伸ばしすることができなくなった。それ以来、ベッドから起き上がる事ができず、七十歳を過ぎた母親が世話をしている。しかし、年老いた母親も両脚が曲がって変形した重度の障害

者で、身長は五歳児ぐらいしかない。

「もしある日、彼の母親が体を壊したら、彼はどうすればいいのか？母親は誰が世話をするのか？」目の前のベッドに横たわっている中年男性を見て、羅さんの心は哀れみと悲しみに襲われ、気持ち

が沈んだまま、こつそりと外に出た。
「私も二十年近く病気を患い、毎日が一年のように長く感じられ、地獄にいるかのようにでした」。壁の片隅に行くとき冷たい風が正面から吹き、目の前には青々とした野原が広がっていたが、新鮮な空気を感じ取ることができず、両目から溢

れる涙をこつそりと手で拭った。周さんの苦しみを、身をもって感じながら、彼は三年前の自分を思い出していた。

希望が見えない病の苦しみ

一九八三年、羅さんは龍岩市連城県の揭樂郷魏寨村の山奥で生まれた。二十歳の時に赤い湿疹が発症し、乾癬という完治できない、免疫系統の皮膚病だと診断された。

薬を飲んだり、漢方医に掛かったりして、アモイで働いて稼いだお金をすべて

使い果たしてしまつたが、症状は良くなる兆しを見せるどころか、益々悪化した。仕方なく帰郷して、毎日ケータイでインターネット投票による仕事で得られる僅かな収入で生活しながら、独学で漢方を学び、安い漢方薬を買って自分で治療した。

乾癬は、悪化すると頭からつま先まで至る所の皮膚に症状が出る。皮膚のひび割れが起きると、耐え難い痛みを襲われる。また、手足の関節が大きく変形して、つま先が九十度上向きになり、足の爪は最も厚いところで一ミリほどになる

ので、大きくて幅が広く、甲が高い靴を履くしかない。足は重いだけでなく痛む。まるで重い岩を縛り付けられ、火に焼かれているようで、長時間立ったり歩いたりすることもできない。

容姿が変わり果てた羅さんは、人に見られることを嫌って病床に横になり、秋の落ち葉が落ちるまでひたすら待つかのように、「これが自分の人生であり、両親がいなくなったら餓死するしかない」と思っていた。

二〇一九年八月三十一日、慈済が連城県で冬季の配付活動を行った時、村の幹部とボランティアが初めて羅さんの家を

訪ねた。そこには壁の隅に無表情な羅さんが座っていた。髪はボサボサで、大小様々な黄色いブツブツが赤くなった全身の皮膚に散らばって、場所によっては厚く積もり、多くの亀裂した傷口には所々血が滲んでいた。

傍にいた羅さんの父親は下を向いて深いため息を漏らし、ボランティアたちに言った。「どうしようもないのです。彼は一年に半年間ぐらいはベッドで過ごしっており、ご飯や水さえも運んであげなければなりません」。

ボランティアは羅さんの側に座り、「こんにちは！私たちに何かお手伝いで



●羅さんは免疫系疾患で全身の皮膚が炎症を起し、関節が変形していた。ボランティアは、2019年8月から見舞いに行くようになり、瘡蓋のできた真つ赤な皮膚に軽く手を当てながら見舞った。(撮影・王燕玲)

きることはありませんか？」と彼の真つ赤な皮膚に手を当てながら尋ねた。

「別にありません。もう慣れました。私よりももっと助けを必要としている人を助けてあげてください」と羅さんは悲しそうな眼差しで言った。

重い足取りで羅さんの家を出たボランティアたちは、彼を助ける方法がまだ思いつかないうちに、助けを拒む羅さんからの六百字近いメッセージが届いた。

「あまり私のことを心配しないでください。長年、治療を求めて来ましたが、結果は徒労に終わりました。この歳で何もできず、親のすねをかじっているだけ



の自分が悔しくてなりません：」。

文脈の中に人生への無力さが表れている。ボランティアたちは心を痛めたが、諦めていない羅さんの気持ちを読み取れた。他人を煩わせたくない彼の心境がよく分かると余計に、少しでも苦しみが和らぐよう、助けてあげたいと思うようになった。

決して諦めない
ただの通行人ではない

列車はアモイのボランティアたちを乗せて、次々にトンネルを通過し、遠く離

れた約三百キロ先の目的地である連城県に向かった。冠多山駅を出ると、事前に約束を取っていた連城県政府関連部署の職員と合流した。車で市街地や原野を通り抜けた後、でこぼこの山道に五十分ほど揺られて、羅さんの家に着いた。

摂氏三十度の気温だったが、壁に持たれて座っていた羅さんは、下着とジャケットを着ていても、寒がっている様子だった。彼は思いもよらず、ボランティアがまた来てくれたことに喜びの驚きをか

●2021年11月、アモイ漢方医学病院に入院した羅さんを、李医師が病室に来て触診した。

(撮影：江采嘩)

感じたが、同じように好意を断った。「私の病気は重症で、皮膚だけではないのです。筋肉にまで達していて、既に方法はありません。あなたたちには、無理ですよ。ここへ来ても時間の無駄です」。

アモイに戻ったボランティアは、豊富な訪問ケアの経験や医療関係のボランティアと話し合って考えた。「乾癬症とは具体的にどんな病気ですか。羅さんは彼に費やすエネルギーを他人に使って欲しいと望んでいます。どうしたものでしょう」。

羅さんは七人家族で、高齢の両親が農業に携わっている他、知的障害を持った

である。そして、羅さん一家とおしゃべりしたり、甥っ子の爪を切ったり、お風呂に入れたり、洗濯を手伝ったりもした。

「時々、山の気温は氷点下一度まで下がって凍りつくので仕事になりません。この服は暖かくて良いですね」。新しい服とズボン、靴下、靴を身につけた羅さんのお父さんは微笑んで「格好いい」と何度も言った。暫くすると、竹の椅子に座っていた彼は、家の中に久しぶりの笑い声を聞きながら、リラックスして眠りに落ちた。

ボランティアの関心に対して、羅さんはいつも遠慮がちで、「皆さん、うちへ

義理の姉とまだ喋れない三歳の姪、そして赤ん坊の甥っ子がいて、警備員を務める兄の僅かな収入で一家が生計を立てている。

何回か訪問して、ボランティアたちは羅さん一家の生活状況をこっそり記録した。彼らの三食は殆どサツマイモの葉にご飯で、父親の服とズボンには穴が空いていて、靴も破れ、義理の姉はサイズの合わない男物のTシャツを着ていた。

ボランティアたちは日用品を手にして羅家にやって来た。家族全員に合ったサイズの服、海苔、麺、五穀パウダー、煮込んだ卵と干し豆腐などを持って来たの

来るなら、物を買わなくても、来てくれるだけで嬉しいですよ」とボランティアたちにメッセージを送った。

「私は生涯何も持つてなく、友人も恋人も暖かい日差しもありません：あなたたちが私に寄り添ってくれたのは善行のために過ぎません」。

「慈済は私の人生においてはただの通りすがりの人です。慈善の目的を離れたら、あえて私に近づく人なんていませんから」。

その後、羅さんは政府が提供した住居に一人で住むようになったが、アモイの慈済ボランティアは同じように毎月行き



来し、頻繁に羅さんに電話をかけたたり、日用品を用意したり、家の掃除を手伝ったりした。また、日常生活での利便性を考えて、洗濯機も購入した。ボランティアが見返りを求めず、自分を家族のように接しているのは、表裏が何もなく、ただ自分の回復を願っているだけだと感じた羅さんは、次第に笑顔を見せるようになった。

羅さんはボランティアに、「あなたたちが来ると、とても暖かく感じます。一般の人は私を見ると遠ざかりますが、皆さんは私のことを嫌がらずに会いに来てくれますし、お喋りをしてくれます」。

アモイで治療し 肩の荷が下りた

羅さんは、自分の変わり果てた姿をこれ以上ボランティアたちに見られたくないと思つて、漢方薬に関する本をより真剣に読み、自分で薬を配合して服用した。しかし、頑固な病は改善せず、彼は次第にイラ立ち、「もうここに来ないでください。旧正月が過ぎたら、皆さんが見つからない場所へ行きます」とボランティアに言った。

彼は冷たく拒否し続け、ボランティアは彼の言葉で気が重くなり、諦めようと

する人も出て来た。メンバーの一人で、医療スタッフの邱蓮娜（チウ・リエナ）さんは、諦めてはいけないと自分に言い聞かせながら、経験豊富なボランティアにも相談した。得られた答えは、「彼が私たちのケアを断るならば、彼の家族をケアすればいい」だった。

「永華さん、こんばんは！あなたに大きなプレッシャーを与えてしまったようで、今月から暫くお邪魔するのを控えます。ご両親と二人の子供には会つてもよ

●2022年の初め、羅さん（左）はボランティアと共に、20年あまり寝たきりだというケア世帯を訪ねた。（撮影・范盛花）

ろしいでしようか」と、邱さんはケータイのスクリーンを見つめながら、慎重に言葉を選んで、羅さんにメッセージを送った。

邱さんのメッセージは太陽のように、羅さんの心を温かくした。彼は邱さんに本音を語った。「あなたたちを拒むつもりではなく、ただ自分の姿が恥ずかしいだけなのです。私の本意は皆さんにご迷惑をかけたくないのです」という羅さんからのメッセージが返って来た。邱さんは心の霧が晴れ、途端に嬉しくなったので、再度治療を試みるようにと励ましながら勧めた。

羅さんには分かった。治療の結果がどうであれ、ボランティアたちに誠意を見せないわけにはいかない。そこで、「分かりました！」という返事のメッセージを送った。二〇二一年十一月十八日、羅さんがアモイ駅の改札を出た時、遠くから群衆の中に、一心に改札口を見つめる見慣れた紺色のシャツに白のパンツ姿が見えた。羅さんを病院に連れて行くために、ボランティアが彼に手を貸して地下の駐車場に下りた時、彼は足の痛み忘れていたことに気づいた。

羅さんは心に温もりを感じた。

「今回出かけるときは心配だと全く感

目の前で良い言葉を掛けても、羅さんには効果がなく、邱さんは心が痛むと同時に焦りを感じていた。しかし、上人の言葉を思い出した。「ボランティアは、苦難に喘ぐ衆生のために、請われなくてもやって来る人であるべきなのです。頼まれもしないのに、私たちは自分から出かけて行くのです」。彼女は辛抱強く、真剣な表情で語りかけた。

「後悔しないためにも、自分自身にチャンスを与えてやってください」。

ボランティアが三年間にわたって、困難だと分かっているにもかかわらず、自分が健康になって欲しいと願うからだと

じませんでした。本当に気分が良いです」。病院でバイオ医薬品と漢方薬を配合した薬で治療したところ、思いがけず、皮膚の炎症が徐々に改善され、顔色も健康的になりました。入院したばかりの時は、指がこわばっていたが、それもかなり良くなった。喜ばしい結果になって、半月間の第一段階の治療を終えると、彼はボランティアの家に泊まり、一週間後の第二段階の治療に備えた。

ボランティアは羅さんに付き添ったり、サイクル活動や読書会に参加したり、公園を散歩したり、一緒に餃子作りなどをした。アモイで一週間の生活は羅さん



にとっかけてがえのない体験だった。というのも、将来、二度とこのような体験はできないとわかっていたからだ。

羅さんはアモイ漢方医学病院の李依寒（リー・イーハン）医師と邱明山（チウ・ミンシャン）主任医師、看護師長の陳干（チェン・ガン）さんの三人宛に感謝の手紙を書いた。なぜなら、彼らが細心の

●2回の治療の合間に、羅さん（右）はコロンス島に来て、ボランティアたちと一緒に沿道の資源ゴミ集めの体験をした。（撮影・王慧娜）

注意を払って診察し、治療して的確に薬を処方してくれたからこそ、重症だった羅さんの体は「千年の氷が暖かい太陽に照らされて溶け始めたように改善していった」のである。

夏に半袖が着られるようになった

二〇二一年十二月二十五日、慈濟ボランティアは羅さんに付き添って、退院手続きを終え、故郷の連城に向かう列車に乗った。彼は窓際の席に座り、次々と流れて行く、車窓の景色を見つめていた。十八年間にわたる、病がもたらした耐え難い苦しみが脳裏に浮かんだ。「健康はどんな富でも取って代わることはできない」ことを実感した。

「アモイでの三十七日間で、生まれ変わったように感じました。夏には半袖が着られます」。

羅さんの病気は免疫系統の疾患で、ただ根治することはできないため、毎月病院に通って治療を続けなければならぬ。しかし、「アモイの慈濟ボランティアのおかげで、アモイの漢方医学病院に行くようになってから、私の人生は一変して明るくなりました。病院に戻って治療を続けるのは、単に病気を治すだけでなく、皆さんとの絆を保つことなのです」と羅さんが言った。

二〇二二年三月三日、ボランティアは車で羅さんの家を訪れた。車から降りた時、羅さんのお母さんが手を振りながら家の前の坂道まで出迎えに来てくれた。



● 第一段階の治療を終えると症状が大きく改善した。羅さんは、アモイの静思書軒で暫し休憩した時、「人は方向が分からなくなった時、とても苦しく感じます。それは自分で物事を決められないからです」という静思語を見た。それは正に自分の心境を表しているようだと思った。(撮影・黄德欣)

「皆さんがいなかったら、うちの息子はこんなに元気にはなりませんでした」。七十五歳の母親は長い間ずっと、こっそりと泣いていた。今、元気な姿に戻った息子を見て、彼女は何度もボランティアにお礼を言った。

三年近くが経ち、羅さんは生まれ変わったようになった。全身の肌はしっかりととして、血色も良く、新たに伸びた爪は次第に黄褐色の厚い爪と入れ替わりつつあった。彼は人と接することを恐れなくなり、自撮りした写真を喜んで友人とシェアするようになった。

ボランティアの付き添いの下、羅さん



● 2021年12月25日、37日間の治療を終えた羅さんは、故郷の連城に向かう列車に乗った。車窓の外の風景が、18年間の苦しみのページを捲るかのように過ぎていった。(撮影・黄徳欣)

は地域のリサイクル活動や読書会、訪問ケアに参加するようになり、仕事も見つかった。あの日、ボランティアと周家の訪問を終えようとした時、霧雨が青々とした山野を包んで雫を垂らす中で、羅

さんは自分の気持ちを整理し、体をかかめて周さんのお母さんの側に行くと彼女の手を取って優しく、「体を大事にしてください」と声をかけた。

(慈済月刊六七二期より)

痛快にやり過ごす

◎文・釋徳侃／訳・濟運



煩惱の「氣」に遮られて足を止めるのも、あらぬ考えから人生に障害を作るのもよくありません。

草花と語り合う

北部の紀静暘（ジー・ジンヤン）さん、林智慧（リン・ジーフイ）さん、林雅美（リン・ヤーマイ）さん、陳美月（チェン・メイユエ）さんたちと座談した時、上人は言いました。

「皆さんは自分たちのことを『おばさん』と冗談のように言いますが、いたって平凡な主婦なのです。しかし、慈濟の志業は、主婦

たちの一日五十銭から始まったのです。早期の慈濟委員は民衆から募金しましたが、五元や十元という僅かな善意であっても、それは全て愛の心です。少しずつ蓄積されていき、今では世界中に志業を広めるまでになりました」。

「私は毎日、医者言うことを聞いて、書齋の外の廊下を散歩しています。花壇の側まで来ると、草花に語りかけています。」「花一輪、草一本にも氣と質があり、目に見える質はその形を成し、目に見えない氣が流れています。昨日芽を吹いたと思ったら、今日は葉を広げているのです。明日また見に行くと、黄色みがかった赤から緑色に変わっていて、目に見えない繊細な変化が絶えず続いているのです。この世は無常で定まることを知らず、人生の本質も同じようなもので、憂慮に値します。道心を永遠に堅持するのは容易なことではありません。私はベテラン委員に会うと、心から労りたくな

ります。私を見捨てることなく側にいてくれる、その師弟の情は貴いものです。それを手放してはなりません」。

「人生は無常でも、因と縁は永遠です。私たちの因はずっと以前に結ばれており、絶えず縁を長く続けることです。天地が続くように、どこに居ようとも、この慈済の情を手放さなければ、方向が逸れることはありません。もし慈済を離れたなら、僅かな差で千里を失ってしまいます。今生で慈済の情がきちんと結ばれていれば、来世での菩薩道は同じように正しいものになります」。

「この数十年間、私たちは台湾や世界で、どれだけ災害支援をしてきたか、数え切れません。できる限り過去に遡って、あらゆる出来事を整理するしかありませんが、あなたたちも覚えている分だけ話してください。先ほどの話はとても素晴らしく、興味深いものです。当時は大変な苦労でしたが、今思い返すと興味深いものを感じ

ます。苦労は既に過去のものとなり、心に残っているのは喜びだけです」。また、上人は、ベテラン慈済人が過去を振り返って、「甘んじてやり遂げた苦労話」をすれば、脳が活性化されると共に慈済のためにもなり、自分の人生を歴史に残すことになる、と言いました。

「私は毎日自分の行為を振り返り、この人生は価値のあるものだった、といつも自分に言い聞かせています。私は間違ったことをしたことはなく、たとえ望み通りにはならなくても、誰一人傷つけたことはありません。もし、私に対して不満があっても、私は最善を尽くしているのですから、何ら恥じることはありません。あなたたちは止まることを知らず、志業を行ってきました。実は『宝は近い』と言われるように、菩薩道を歩む時には止まってはいけないのです。その道中では『化城』で足を休め、体力が回復すれば、再び出発し、『宝城』に向かって進み続けるのです」。

「自分のあらぬ考えで自ら障壁を作ってはいけません。その実、人生の障壁の多くは自分が作ったものなのです。時間は人を待たず、道を歩いても石につまずいて不用意に怪我し、屈んで『痛い』と叫んでも、治るまでには時間が掛かります。もし痛みを我慢して進めば、そのうちに足の痛みは忘れてしまいます。そこに止まって治るのを待っていると、却って益々痛くなるのです。以前にも『痛、快』について話したことがあります。痛みを早くやり過ぎるのは進歩している証拠です。人と摩擦が起き、一度傷つくと、立ち止まって癒えるのを待ちますが、その間に後ろの人が追い越し、いつまで経っても人後に落ちてしまうのです。歩み出そうとする時、既に前の人とはかなりの距離が開き、その『氣』に遮られてしまいます。ですから、人生では煩惱の『氣』に遮られないようにすべきです。さもなければ、意地になって足を止めることは自分の慧命の成長を止めることに他

なりません。慧命は前進し続けなければならないのです」。

「進むか止まるか、または後戻りするにしても、時間は同じように過ぎて行きます。自分でどれを選択するかです。今の行いが正しければ、その方向が逸れないようにすることであり、毎日正しい観念を持って正しい方向に進むのです。『八正道』を守り、精進して『六度』を行われなければなりません」と上人は言いました。

「皆さんはまだ元気なのですから、縁を逃してはいけません。私も皆さんの歳に近いのです。発心立願し、時間を無駄にせず、慈済の志業をたくさん伝えてください。そして、若い人に付き添い、過去の経験を話してあげれば、それが説法になるのです。六根の機能を發揮するには、眼（げん）・耳（に）・鼻・舌・身・意がはつきりしていなくてはならず、慈済という道を進む過程で、人を導いて付き添うには、心とその方向がしつかりと正しくなければいけません」。

（慈済月刊六七八期より）

六月の出来事

訳・済運

06・01

◎モザンビークのサイクロン・イダイ被害を支援している慈済基金会は2022年4月、ニヤマタンダ郡メトウシラ地区で三つ目の大愛村の起工式を行い、本日、完成した家屋を35世帯に引き渡すと同時に、毛布、マットレスと折畳式テーブル及び衛生用品などの物資を贈った。

◎慈済アメリカ総支部は、中南米から熱帯雨林を経て違法にアメリカに渡って来た、自称「レインフォレストマン」の中華系移民のケアを行なっているが、本日モントレールパーク市で351世帯を対象に、米とパン、まんじゅう、新鮮な野菜や果物などの食糧を配付し、

中古の食器類や衣類を必要な人に提供した。

06・05

◎「国連気候変動枠組み条約（UNFCCC）補助機関（SBI）による第58回会合が5日から15日まで、ドイツのボンで開かれた。慈済基金会アメリカ総支部の職員、裘曜陽さんとドイツ慈済ボランティアの楊沃福（済洪）さん、林美鳳さんが基金会を代表して出席した。気候変動に関する最新情報を得た他、各国や団体と慈済の環境保全理念及び経験をシェアし、協力パートナーとの関係を強めた。

◎慈済基金会仏国プロジェクトチームはネパール健康・環境・気候変動対策財団（HECAF360）と協力して、本日ルンビニ文化市にあるテルハワコミュニティ学習センターで、7日間の布ナプキン縫製教室を開き、初日15人の女性が参加した。

06・10	<p>での手術衣更新の必要性を知り、医療品質の向上のため、本日90枚の手術衣を贈呈した。また、ボランテニアはチュバット州ラーゴプエロ消防署の消防車購入を支援し、9日贈呈式が行われた。</p> <p>◎慈済基金会仏国プロジェクトチームは、インドのシローンジャ村で健康診断活動を計画した。7日にスタッフとして参加する住民20人に、健康診断室で血圧やBMIの測定などを訓練すると共に、健康的な食習慣の宣伝を行った。本日より健康診断が始まり、訓練を受けたスタッフが村民に検査を行い、ボランテニアが側で指導した。</p> <p>慈済アメリカ総支部はロサンゼルス郡精神保健局（LACDMH）、カリフォルニア精神保健サービス局（CalMHSA）と協力して、アルハンブラのアルマンソール裁判所で「行動による回復力」講座</p>
-------	---

06・08	06・07	06・06
<p>◎アルゼンチン慈済ボランテニアは、リオネグロ州のボルソン病院</p>	<p>フィリピン慈済人医会と慈済ボランテニアはボホール州衛生事務所及び教育部医療スタッフと協力して、サグバヤン郡区で歯科の施療を行い、108人の患者が訪れた。</p>	<p>災害時物流空輸関係のairlinkは6日と7日、フィリピンで第一回アジア地区協力パートナー会議を開いた。アジア地区の輸送基準を理解し、災害支援での協力の枠組みを立ち上げると共に、防災や備蓄効果を上げることを目標とした。招かれた慈済基金会からは執行長室グローバル協力事務発展室（GPAD）職員の涂君擘さんと呂芷華さんが代表で出席した。</p>

	<p>分かれて花蓮静思堂で行われた。一回目は15日から19日まで、マレーシア、シンガポールから625人が参加した。二回目は21日から25日まで、モザンビーク、ジンバブエ、アメリカ、オーストラリア、フィリピン、インドネシアなど19の国と地域から588人が参加した。新型コロナウイルスの影響で研修会は3年間中止され、海外から台湾に来て認証を受ける夢が叶わなかったため、今回は特別に四回目の認証式典を行い、1034人が證嚴法師から委員証を授かった。</p> <p>◎慈濟基金会グローバルボランティア総監督の黄思賢さんと宗教處職工の周利貞さんは、慈濟医療財団法人の林俊龍執行長及び花蓮、台北、台中慈濟病院のメンバーと共にインドネシアを訪れ、15日から18日まで、「2023年国際人医フォーラム及びインドネシア慈濟病院開業式典」が開かれた。</p>

06・15			
06・12			
06・11		<p>150世帯を支援した他、42人の学生に視力検査を行った。</p>	<p>を聞き、専門の学者を招いて情緒をコントロールする方法を紹介し、大衆のメンタルヘルス能力の向上を目指した。</p>
	<p>慈濟基金会がモザンビークで行っているサイクロンイダイ災害支援プロジェクトのうち、ソファアラ州のクーラ、ジョキムマラ、グラサマケルの3つの小学校の支援建設が完了した。本日引き渡し式典が行われ、州知事と教育局長などの来賓が参加してテープカットが行われた。</p>		
	<p>◎慈濟基金会2023年海外養成委員・慈誠精神研修会が、二回に</p>		

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966
志業センター (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

アメリカ

総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ニューヨーク支部
(New York)
TEL: 1-718-8880866

香港

TEL: 852-28937166
フィリピン Manila
TEL: 63-2-7320001
タイ Bangkok
TEL: 66-2-3281161-3

花蓮慈济医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825

玉里慈济病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718

関山慈济病院
956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880

大林慈济病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000

台北慈济病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779

台中慈济病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-36060666

斗六慈济病院
640 雲林県斗六市雲林路2段248号
TEL: 886-5-5372000

慈济大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301

台北支部 (新店静思堂)
231 新北市新店区建国路 279 号
TEL: 886-2-22187770

慈济人文志業センター
112 台北市立德路 2 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989999

静思人文
TEL: 886-2-28989888

カナダ Vancouver
TEL: 1-604-2667699

メキシコ Mexicali
TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo
TEL: 55-11-55394091

イギリス London
TEL: 44-20-88699864

フランス Paris
TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg
TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam
TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg
TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna
TEL: 43-1-7346988

南アフリカ Gauteng
TEL: 27-11-4503365

中国蘇州
TEL: 86-512-80990980

ベトナム Hochiminh
TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL: 95-1-541494

マレーシア
セラランゴール支部 KL
TEL: 603-62563800

ペナン支部 Penang
TEL: 604-2281013

シンガポール
TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta
TEL: 62-21-5055999

大愛テレビ局
TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota
TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman
TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul
TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL: 64-9-2716976

慈濟

2023年7月20日発行・319号

中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄

Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈济基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路2号

編集 慈济日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@daaitv.com

慈济基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈济に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いです。(日文組編集同人)

新サイトのお知らせ



慈濟ものがたり



読みやすくなりました

携帯、タブレット、PCのどれでも快適に操作できる構成で、見やすい画面にしました。いつでもどこでも、慈済の情報が入手できます。



語り部になりました

本文には写真や動画も掲載されています。また、新しく読み上げ機能が加わったので、中国語を読んで聞いて、語学学習もできます。



分かち合いがゼロ距離に

タップするだけで、善行のノンフィクションを分かち合えます。感動を是非その手に！

慈済機関紙ウェブサイト

美善ものがたり、心の故郷

